故大隈重信侯十年祭

日比谷公會堂において國民敬慕の大追悼祭

來る十一日午後六時より

一世の偉人、従二位大勲位大隈重信侯が全世界の哀悼を一身にあつめ、思出多き早稲田邸に逝いてから早くも十年を過ぎた。當時この民衆的巨人を送るに「國民葬」といふ空前無比の國民的一大合同式が日比谷公園に挙げられたことも未だ人々の記憶を去らぬであらうが、たまゝ入り身の國歩多難の時に會し、著者は老侯に對する追慕の念「歴史さもの」といふ名が、謬を合せて國民敬慕の意を表するため、來る十一日午後六時から、所も同じ日比谷の公會堂に大隈侯國民敬慕會」なる一大追悼の夕べが催されることになつた。

祭典はAKから仲繼放送

永久に朽ちない侯晩年の大勲功

世界大戰參加の大英斷

若槻禮次郎男談

偲ばるゝ巨人の面影

侯の特性

過去はいはず未來へ〳〵と

犬養首相談

◇在りし日の大隈重信侯

太陽西に沒して暗澹たる今の政界

「人間大隈」の大きな天地

永井柳太郎氏談

國民敬慕碑

護國寺内に建つ

碑文

第一号出づ

早稲田大學講義

今こそ入學の絶好期

開講以來既に數百萬の卒業者を出した最も完備せる獨學機關。今回の入學者には早大五十周年記念の大特典がある。

中學講義

仕事の傍ら、中學卒業の實力を得て立派に進級をしたい人、專檢に合格して更に上の學校へ進みたい人は本講義を讀むに限る。講義は親切丁寧に解り易く、且つ内容豊富。日本第一の優秀なる中學講義であります。

了部六ケ年　月一〇〇

高等女學講義

本講義は第一流の高等學校の先生方が親切に解りよく書いたもので、此講義で勉强すれば優かの學力が得られ、專檢にも合格が出來、其外家庭の婦人として必要な種々の常識も得られます。

研究部月費一円　行商部一ヶ月分　郵送料月額一ヶ月分

商業講義

男でも女でも商業の知識さへあれば、不景氣でも就職は百有餘萬人はない。本講義は商店、會社、銀行方面に志す男女の爲めに發行するので、之さへ讀めば一ヶ年半で中級學校卒業の實力が得られ、立身出世が出來ます。

文學講義　月一〇〇
政治經濟講義　月一〇〇
法律講義　月一〇〇
建築講義　月一〇〇
電氣工學講義　月一〇〇
電氣工學補備講義　月一〇〇

文學講義は文藝の愛好者、作家批評家志望者、文檢國漢文受驗者の爲め、政治經濟講義は商學專門の學識を得たい人、高等文官受驗者等の爲め、法律講義は司法官・弁護士・代書人・更正志望者並に法律知識を得んとする一般人の爲、電氣建築の二講義は夫々の技術を修めたい人々の爲めに發行する。

見本進呈

東京・牛込　早稲田大學出版部

郵便振替口座東京二三三一番

家庭一品

品質効力第一
歯磨界のナンバーワン

NO.1

クラブ歯磨

最新科學の極致を盡して精製せる最も優秀なるクラブ歯磨

歯牙の健康と美を守るクラブ歯磨は、歯の大敵たる乳酸を發生せしめず、琺瑯質を保護するとともに歯齦を強くし、口臭口熱を去つて精神を爽快ならしめ、化學的に歯を強く美しくし、使用後も口中を清潔に保つて口腔衛生の目的を完全に達する理想の歯磨であります。

粉大 5セン
煉中 10セン
煉大 20セン

家庭一品クラブ歯磨
の輝かしいマーク

今も昔と變らぬ老侯敬慕の情

眞に一世の師表として國民に與へた教訓

◇護國寺の老侯奥津城

大隈重信侯逝いて、十年の春秋は夢の如く流れたが、故侯を慕ふ國民の悲情は、今もなほ在りし昔と變ることなく、國歩の艱難、思想界の混迷たる今日、まゝ〳〵この大偉人を想ふの切なるものがある。日東大帝國の建設にその巨腕を揮ひし侯、世界的偉人の感名たるはしいまゝにせし侯、政治に教育には思想に、一世の師表として、國民の一大羅針盤たりし侯、しかして重疊たる生涯の波瀾と、曲折せる活動の跡を今にして想ひ、そのことゞ〳〵が教訓の資なきはない。

署名されるのを一、二度垣間見た

偲ばる、「無筆の英雄」

武富時敏氏談

偉大な新聞記者

「世界の道は早稲田へ」

市島謙吉氏談

大隈老侯

可愛がられた——私の「愉快なお爺さん」

久原房之助氏談

死ぬまで一貫した侯獨特の抵抗力

法學博士　浮田和民氏談

驚くべき讀書家

世に廣く知られぬ侯の反面

法學博士　鹽澤昌貞氏談

◇兩巨人のおもかげ（左大隈老侯　右アライアン氏）

敬慕の歌

西條八十

侯の年譜

清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地　電話牛込(34)

大隈侯八十五年史
偉人の再現!!
大隈侯八十五年史　刊行會

東京神田・振替東京五一〇一番　冨山房
全四册　定價四十五圓　月賦

大隈侯の創立になる講義錄
大特典
實業講習錄
見本進呈
申込所　帝國實業講習會
食費一ヶ月壹円
長　増田義一
甲種商業全科・講習三十四科目
今入會者に限り名著を贈呈す!

懸賞俳句・川柳の入選發表 第三回

俳句

『柳』

長谷川かな女氏選

一等

柳吹く風和しいくさの子　東京　牛尾　南風

ふるさとの柳のみどりあるかぎり　東京　嶋岡みゆき

一番乗り事なき戦日柳芽吹　東京　嶋岡みゆき

柳芽吹く日覆の音・柳芽吹　東京　嶋岡みゆき

二等

川音ぞんぶん柳しだれけり　神戸　村上きよし

猫柳のほゝけて虫を集めけり　町田　南田　磨洋

先生と堤に遊ぶ柳の芽　熊谷　小宮　志津

乗り柳小雨ときどきひけり　北埼玉　飯島　賢一

三等

あふらるゝ日覆の音・柳芽吹　東京　嶋岡みゆき

ふるさとの柳のみどりあるかぎり　東京　嶋岡みゆき

花園に花となりたる猫柳　千葉　石田　[illegible]

ふるさとや柳のみどりあるかぎり　京都　牧本七郎

芽柳に光る鳴の翼かな　[illegible]

隅門のふもとの柳木柳かな　[illegible]

選外佳作

[illegible]

川柳

『ピクニック』

近藤飴ン坊氏選

一等

ピクニック二足幾つの足伝ひ切れ　東京市外豊島谷町　福田　安九

ピクニック遊びの工女煙突高く見る　群馬郡下豊山村　鈴木万喜子

二等

ピクニック遊びの工女煙突高く見る　群馬郡富貴野町　大谷　ふみ

横須賀重砲聯隊　本間　利宗

ステッキと子と取替へピクニック　[illegible]

三等

行く先に朝の陽ぶるピクニック　長崎市水の浦町　福嶋　俊一

少子子なり乗せるピクニック　群馬郡下豊山村　鈴木万喜子

良き母に送り出されてピクニック　[illegible]

選外佳作

[illegible]

全く自然の照映

長谷川かな女

病床で大喜び

一等當選の福田翁

欣快慶賀

飴ン坊

生殖ソピカツト

機能を充溢せしめて春宵一刻愈樂し!!

萬象蘇る春!!老若男女の別なく永い冬の鬱屈から伸び上る愚みの春!!凡ての細胞は一齊に活動を開始すると同時に各種の病源菌にも春が來た事を忘れてはならぬ

殊に吾人等に春は物憂しと感じさせるものは性慾の顯著な減退である。從つて精力、頭腦の衰微を加へ倦怠を訴へるは蓋に五十六十の老齢のみならず、二十、三十の若者にもこの神經衰弱的早老の兆候が見出せる。今にして對策を講じなければ悔は千歳に殘ると斷言する

下記の病状の人々に

是非推奨す

◇神經衰弱
◇性的早老
◇除菌早期
◇遺精夢精
◇不眠症
◇健忘症
◇ヒステリー
◇記憶力衰へ

更に健康を誇る男女も元氣精力の補給劑として本劑を常に服用すれば一種言外の強味を感得すべし。

全國到處の藥店にあり

[illegible]

故大隈重信侯十年祭

日比谷公會堂において國民敬慕の大追悼祭

來る十一日午後六時より

一世の偉人、從一位大勲位大隈重信侯が全世界の哀悼を一身にあつめ、思出多き早稲田邸に逝いてから早くも十年を過ぎた、當時この民衆的巨人を送るに『國民葬』といふ空前無比の國民的一大告別式が日比谷公園に擧げられたことも、未だ人々の記憶を去らぬであらう、たまく〳〵内外國歩多難の時に會し、老侯に對する追慕景仰の念一層深きものがあるといふので、清浦伯を初め一木宮相、富井樞府顧問官、若槻民政黨總裁その他朝野の名士一千餘名が、聲を合せて國民敬慕の意を表するため、來る十一日午後六時から、所も同じ日比谷の公會堂に『大隈侯國民敬慕會』なる一大追悼の夕べが催されることになつた

祭典はAKから仲繼放送

當日式に先だつて市政會館内果祥軒で發起人賛成人會が開され、主唱者を代表して町田忠治氏挨拶、實行委員長市島謙吉氏の經過報告あり、大隈信常侯の謝辭があつて後、午後六時二十分一同公會堂に入ることとなつてゐる、公會堂における祭典は先づ一同起立黙祷の除幕式を行ひ、數十輪の代表によつて花が捧げられる、次いで山本瀧太郎氏の祭文を朗讀し、敬禮（西園寺八十氏代作）が數百名の女子大生、早中生等によつて奉唱される、かくて祭典を終り、直ちに勝鬨橋に移り、若槻、床次、德富の諸氏の老侯追慕談の後老侯の一日その他故人に關係ある祭壇十數卷を陳列することになつてゐる、當日の祭典はAKも仲繼放送するとのこと、時間のことに及んだ

この大隈邸においては、參戦が否かについて議論沸騰し、那常に緊張した光景を呈したが、その結果、帝國政府は、毅然として日英同盟の誼を重んじ、斷乎として對獨宣戦を敢行するの方針を取ることに決定した、これは實に國運を賭した大問題であつたが、大隈内閣はこの一大決戦を起すの重責に出たのである、當時大隈首相は確乎たる信念を持つて毅然自若の態度を取りまとめ、よく事を誤ぜられたことは、我々をして大いに感激からしめたが、かゝる場合において、侯の人物の偉大なところが、遺憾なくあらはれたのである、しかして敵となり、我隈漫歌の力に、西園寺公を攻撃し、東洋における日露戦爭は、光榮ある勝利に終局したは永遠に消えない侯の偉業の功といはねばならぬ

× ×

それから大隈内閣當時、今に侯に接觸したことは、大臣としての私の職務が主に國際、で下さつたことで、實は當時の國際は、極度に困難、財政經濟の方面々な不安が續いたが、でも私は、いくらしても財政の根

太正五年、月十二日老侯が臣として、冨田朝殿におシアの皇族ミシェル太公殿

永久に朽ちない侯晩年の大勲功

世界大戦參加の大英斷

若槻禮次郎男談

故大隈侯の十年祭に際し、實に感慨無量なものがあります、私が侯と直接關係を持つやうになつたのは、侯の晩年に組織せられた最後の大隈内閣の時であつた、その時に私も大隈大臣として閣臣の一人に列し、當時七十七歳であられた侯と事を共にし、國家の爲めに微力を捧げたのは、私の光榮として永く忘れることの出來ない印象である

× ×

この大正二年四月に組織せられた侯の最後の内閣は非常に多事多難な國家の重大時局に處したのである、我國の歴史上からいつても實に未曾有な轉期的な一時代であつた、即ち有史以來の大事件世界大戦が、この大隈内閣の間に起つたのである、しかして當時、我國は日英同盟を締結してゐた關係上、この世界的大戦の渦中に投ずべきやいなやといふ實に容易ならぬ國家的大問題に直面したのである

× ×

丁度八月初旬のある日、當時英國の外務大臣エドワード・グレー氏から、外相加藤高明男に宛て、緊迫一つの通牒が届いた、それはドイツの東洋艦隊が支那海に殘つてゐるから、日本の力で是非これを撃滅してもらひたいといふ援助の依頼であつた、そこで早速國際會を開くために夜の八時頃から大隈首相の早稲田の私邸、即ち今の大隈會館の大廣間に關係全部を集して、緊急大會議を開き、當日

偲ばるゝ巨人の面影

故侯の遺德を追慕し顧するについては、天下その人の多きに苦しむであらう。交友全世界にあまねくして、早稲田の大隈であり、未來永劫の大隈であり、世界の大隈であるであらう。維新の志士として、また明治大正にかけての大なる政治家として、波瀾重疊を極めたその生涯を追憶し、それを繼承すべき事柄の多いのは勿論であるが、後世への貴重なる遺物として現在に優存する侯の事蹟についても、聽なく多い。高遠なる理想に生き、終始青年の意氣を喪ふことなくして、聽やかに生涯を終つた故侯の風格は、また復離きこの世の光明であつた。

○

時勢にして偉人を造ふ。世相の險惡なる今日の如きは、國運の危急また今日の如きは稀なるに方り、逆風はこれを迎へて勇敢に戰ひ、狂瀾は巧みに避けてこれを乘り切つた不世出の政治家が、若し今の世にあらばその獨一層深きものある、大隈侯統治の偲しをして、眼を未來にそゝいで高遠なる理想に生きた、みちた風貌を記憶の中より喚び起すことによつて、やがて國民各自の心の中に、國運刮目の勇氣と希望とを蘇らしむることなくんば、いまだ以て故人を聽り、故人を冥冥するものといへない。

○

十年一昔とはいふが、その一昔が時として長くも感ぜられ、はやくも感ぜられる。早稲田の巨人大隈重信侯が、長逝を擲つて後進子弟を鼓舞激勵したその鴻業たる風姿は、今なほ眼に聽動するものあるに拘はらず、侯逝いて後早くも十年の歳月が流れたのである。侯の生涯は永久に死せずといふ一句であつた。いやしくも世に偉人と稱せられ、傑出の士と認められるゝほどの人は、たとひ死するもその聽名を後人の心に留め、何時までも生ける人間標の觀きをなすだけの不思議な力を持つて居る。去る者は日々に疎しといふも、侯の場合において、十年の歳月はあまりに短く、侯に對する世人の敬慕と記憶とは、今もなほ生々しきものあるを覺ゆる。

○

侯の人生觀は、天下その人の少きを數へ、すべて、むしろその人の多きに苦しむであらう。交友全世界にあまねくして、早稲田の大隈であり、未來永劫の大隈であり、世界の大隈であるであらう。維新の志士として、また明治大正にかけての大なる政治家として、波瀾重疊を極めたその生涯を追憶し、それを繼承すべき事柄の多いのは勿論であるが、後世への貴重なる遺物として現在に優存する侯の事蹟についても、聽なく多い。高遠なる理想に生き、終始青年の意氣を喪ふことなくして、聽やかに生涯を終つた故侯の風格は、また復離きこの世の光明であつた。

○

時勢にして偉人を造ふ。世相の險惡なる今日の如きは、國運の危急また今日の如きは稀なるに方り、逆風はこれを迎へて勇敢に戰ひ、狂瀾は巧みに避けてこれを乘り切つた不世出の政治家が、若し今の世にあらばその獨一層深きものある、大隈侯統治の偲しをして、眼を未來にそゝいで高遠なる理想に生きた、みちた風貌を記憶の中より喚び起すことによつて、やがて國民各自の心の中に、國運刮目の勇氣と希望とを蘇らしむることなくんば、いまだ以て故人を聽り、故人を冥冥するものといへない。

侯の特性

過去はいはず未來へ〳〵と……

犬養首相談

◇在りし日の大隈重信侯

◇大隈老侯が亡くなられて、もう十年になるかの、大隈さんと親んだ人では、我輩が一番古からう、我輩は他の人と異なつて表面の政治的の事ばかりでなく、家事にまでも關係してをつたのぢやからな、大隈さんは事に當つて、それからもう一つの特質は、既往を一切いはなかつたことだ、いつも未來々々と進んで、そして極めて樂天的な人ぢやつた、伊藤、井上なんかも思つてる程仲は惡くはなかつたよ

◇：大隈さんが官を退いたのは、我輩が校長になつた明治十四年ぢやつた、だからそれ以來我輩は校長になつたことがない、といふのは大隈さんが進歩黨を組織してからは、我輩は今の丁度總務と幹事長を兼ねたやうな仕事をやつてゐた、自分が校長になる前に、他人を閣員にするといふ譚でな、黨の事は一から十までやらねばならんのぢやからのう、あの進歩黨の分裂は、我輩が支那革命で渡支した留守中の出來事でな、我輩さへ居ればあんな事にはならなかつたのだ、そんなことなら我輩が大隈さんと離れても、我輩は黨を攻撃したことはあるが、大隈さんを攻撃したことはない

◇：何といつても、大隈さんが邸宅の時代は、我輩は根岸の隱宅に閉居を見ない、時の國會黨から反對された條約の正もぢや、あの時代としてはいふ家なのぢや、それが反對黨といふのが無論でな、つまり外國人に內地雜居を許すやうになれば、北海道なんかは終に露西國人に奪取られてしまふなんて、甚だしい論を吐いて無暗に反對したのぢやからな、我輩はその頃、あつちこつち飛び廻るには、家を持つてるちやいかんと思つてな、冊と妹だけのぢやから、冊を根岸に隱居させて我輩は下宿住をしてゐたものぢやよ、その冊の病氣見舞に大隈家へ行つたが、初めてのことで今一つあるまかつたかなあ、あの頃は、冊の子の鶴麿、冊の兄つぼいの子の鶴麿、冊の兄つぼいの子の鶴麿、冊の兄つぼいの

太陽西に沒して
暗澹たる今の政界
『人間大隈』の大きな天地
永井柳太郎氏談

物の値段なんなところが、複雑な現代となり、陸海軍の力によつて帝國を支配し、東洋艦隊を撃滅し、東洋における日露戦争は、日本の光輝ある大勝利に終局した、これは永遠に朽ちない偉業中の一大功といはねばならぬ

×

それから大隈内閣當時、今一つ特に偉に感服したことは、大隈太臣としての私の財政方針を非常によく解して下さつたことである、實は當時の政局の形勢が極めて複雑多難、財政經濟の方面にも種々なる不安があつたけれども、私はたとへ財政の根本方針を立て直して、先づ經費の思ひ切つた整理節減を斷行すると同時に、他方陸海軍費の問題、鐵道建設費の問題等を解決して行かねばならぬと覺悟して居たのである、自分の未自分の立てた財政方針を大隈自相に充分説明したい思ひで、加藤外相からも財政の話は自相にシツカリ打ち込んでおき給へと注意されたので、私は大隈自相に向つて二時間ぶつ通しで絶対に他の客に會はないやうにして、私の話を聞いてもらひたいと申込んだ

×

ところが侯は快くこれを承諾され、約束通り二時間ばかり、私の財政意見を聞いて下さつた、その時侯はたゞうなづきながら靜かに聞いて居られたが、何んにも意見をさらぬ、私は實のところ心を御意見を乘ることと、内々覺悟して居たのであるが、一つも御意見がなくてたゞ一言『君の意見はよく分つた、それでよろしいから、シツカリやつてもらひたい』と申されたゝ私はそれでもなほいさゝか不安を感じて、侯はよく私の説明を御納得下さつたのかしらんと案じて居たが、その後ある機會に、侯の演説を聞いたところ、ことゝ〳〵私の意見をそのまゝ御取入れになつて居られた、その記憶のよいのと御説振りには、大いに感服した

大正五年一月十二日老侯が總理大臣邸に參殿して の臨途、早稲田の私臣として、宮中農明殿におけるロシアの皇族ミシエル大公殿地の御宴に參列して の臨途、早稲田の私邸附近で、福田和五郎一派の暴漢に襲はれて爆彈を投ぜられ、爆彈は自動車に命中したが幸ひにして老侯は無事に難を免れた

大隈重信侯

首相談

ちやよ、その母の看護に行つて大隈さんの遺言を聞いたのぢやの。大隈さんは遺言以前までといふものは、元気で愛嬌だつたが、あの遺言からといふものは、すつかりお世話がうまくなつたものだ、もう一面白い、愛はな後年は大隈家になつたが、初めは面白もあまりうまくはなかつたしかし、大隈は大隈りまかつたが、我輩に無敵したことで今一つある、家の子郎黨や親戚の荒つぽいのが、下駄で奇襲を試したり、大あくらをかいて天下國家を論じたりの事、奥さんが、我輩してゐた時の事、奥さんが、我輩によくこの話はしたものぢや、その度に我輩が『奥さんあれがいゝのだ、伊藤や山上の根城と異つて、あゝいふ人達が我が大隈の味方なのぢやから……』といつたものぢやよ、大隈さんが後世民衆政治家といはれるようになつたのは、吾々の力が與つて力がある、我輩が今でも民衆に感謝に思つてゐるのは、とう〳〵あの大隈中に會へなかつた事だ

爆發

しなかつたゝめ、老侯は無事に難を免れ、朝見式に赴くと、老侯は事實騒然として居られた

しかし二つとも中つたが、しかし二つとも爆發の調合を誤つたため爆發しなかつた、これは大隈重信にまだ天の御用のある證據だ、おれは今回のことでも毫も動揺を泪はしないのみならず、かへつて大隈になほ天の御用あるを知つて再驚自信した老侯が信念の人であつたことはこのことでもわかるやうに、天命を奉じて君國の事に當るといふ維新の

志士

達のやうな、屬觀的信念に滿に燃えてゐたから老侯の生涯には、常に緊張があつた、大抵の人間は大臣になつて見ると衰弱する、一度大臣になると『おれは大臣だ』といふ意識を、暫くもすれば失はないで、人に會ふにも大臣のつもりで會ひ、話しをするにも大臣のつもりで話す、だからいひたいこともいはず、笑ひたい時にも笑はず、『大臣』が腹一杯につまつて人間性を失ふものが多い、老侯は在朝世野を問はず、失意の時でも得意の時でも人間大隈であつた。

老侯

中のどこか一部分を占めてゐたには相違ないが、『總理大臣』以外の人間として考へるべきことを考へ、笑ふべき時には笑ふ大きな胸があつた、老侯が最後の内閣を組織して最初の閣會——解散閣會——に臨む朝のことだつた、私が老侯を私邸にたづねると、老侯はすでに服裝を正して『出掛へ出て來たが、まだ時間があるから話さう』といつて椅子をすゝめこんなことを話された

人間

の思想といふものは何處か一致するところがあるものだ、トルストイとニーツエとは、隔絶極端の思想家だ、トルストイは絶對の愛を說いて、殺人官でも人を殺すのは惡いといふので、これは

天命

を待つといふ、その信念が風雲を前にしてなほ且この心の平和を與へたものであらうと私は思ふ、我國の政治家中には宗教や哲學に理解を有する人は極めてまれだ、一萬一派の指導者は多數にあつても、國民の指導者がほとん一絶無といつてもいゝのは、こゝに原因してゐるのではなからうか、老侯は宗教に對しても特別の理解と敬意とを有してゐた、かつて數年東京のプロース大將が老侯を訪問した時、例によつてその御自慢の庭園に案内した、大抵の外客は必ず

庭園

をほめてお世辭の一つもいふのであるが、プース大將はお世辭どころかこの庭園はなるほど立派だ、しかし私はこの庭園よりなほ優れた庭園を持つてゐる、それは地上の庭園にあらずして天上の庭園である、私はあなたが天上の庭園を楽しみ得る人となるやうにといつた、老侯もこれには驚いたといつた、老侯もこれには驚いたさうだが、しかし直ぐ『どうぞお斬り下さい』といつたら、プース大將は老侯の眼に感き、永いこと感嘆した、老侯も大將のこの感激なる信仰には非常に

感激

されたと見えてしばゝ私に

といはれた、老侯が數百年に斯附金をするやうになつたのはこれからのことである、老侯曰いて既に十年、我國の政界は太陽西山に没し夜に輝く星の數だけ、あの眼に感き、我國の政界に、再び老侯の如き太陽出でよと私は叫ばざるを得ない

親心に泣く

成田の曼陀羅

侯が親心の有難さに泣いた話し……それは明治四年六月十五日大隈さんが下總の成田山に詣でた時のこと、侯は奉戒もく浴をなし精進料理をとつた上、奥の院に參詣した、その時正面に自分の名を記した墨の曼陀羅がかへられてゐたが、これを見た侯はびつくりして傾聞にたづねると、これは侯の母堂が、我が子の立身出世を祈願して納めたものとわかつた、これをきいた侯は有難い親心に、しばしのほどは感激の涙にむせんだといふことである

私は

老侯のこの無學の感懷の發露を考ふるよりも、およそ世界の宰相の中で、まさに解散されんとする議會の風雲を前にして、開會時間が一時間の後に切迫してゐる時、悠々と古今の哲學を談じ得るが如き豪裕いやく〳〵たる政治家が果してあるであらうかと驚かざるを得なかつた、總理大臣としての外に、人間大隈としての大きな天地が殘つてゐたことは、この一事でも明白である、かゝる豪裕は老侯獨特の風雲を前にして、開會時間が一時間の後に切迫してゐる時、悠々と古今の哲學を談じ得るが如き豪裕いやく〳〵たる政治家が果してあるであらうかと驚かざるを得なかつた、總理大臣としての外に、人間大隈としての大きな天地が殘つてゐたことは、この一事でも明白である、かゝる豪裕は老侯獨特

權力の否認

權力の否認は無政府だ、ニーツエは天才は萬人を支配する權利があるといふ、天才はその權能のために天才にとらさる支配者を征服することも許される、だから天才には革命の權利があるといつてゐる、革命は權力の否認だ、無政府だ、こゝにおいてか極端なる東洋にもニーツエでも、一致する所があるではないか

老侯のこの無學の感懷の發露を考ふるよりも、およそ世界の宰相の中で、まさに解散されんとする議會の風雲を前にして、開會時間が一時間の後に切迫してゐる時、悠々と古今の哲學を談じ得るが如き豪裕いやく〳〵たる政治家が果してあるであらうかと驚かざるを得なかつた、總理大臣としての外に、人間大隈としての大きな天地が殘つてゐたことは、この一事でも明白である、かゝる豪裕は老侯獨特

國民敬慕碑
護國寺内に建つ

故大隈侯國民敬慕會の記念事業の一つとして、護國寺の境内に建設される國民敬慕碑は、高さ六尺二寸、幅四尺のもので日本固有の耳をつけ、臺石には古代ギリシヤ風の雕刻をなし、東西獅子の彫像をとつたもので、設計並びに監督は桐山孫一氏である、碑文は左の如し

碑文

侯爵大隈重信公已薨之十年國民敬慕會爲倚祭於日比谷公園。實昭和七年四月十一日也。公相兩朝。勳業炳燿。其退而在野也。聲望又隱然動天下。祭之日。四方來奠拜者萬數。其遺德久而益顯如此。今也國步艱難。內外多虞。國民之思公而不已者。良有以也夫。

故大隈侯國民敬慕會建之

第一号出づ

早稲田大學講義

今こそ入學の絶好期
開講以來既に數百萬の卒業者を出した最も完備せる獨學機關。今回の入學者には早大五十周年記念の大特典がある。

中學講義

仕事の傍ら、中學卒業の實力を得て立派に世渡りをしたい人、專檢に合格して更に上の學校へ進みたい人は本講義を讀むに限る。講義は親切丁寧で解り易く、且つ内容豐富。日本第一の優秀なる中學講義であります。

前期中學費壹圓　後期學費壹圓四十三錢
一ケ年分一時拂　一ケ年分一時拂
雜誌無料進呈

高等女學講義

本講義は第一流の女學校の先生方が親切に解りよく書いたもので、此講義で勉強すれば僅かの費用と年月で誰でも高等女學校卒業の學力が得られ、專檢にも合格が出來、其外家庭の婦人として必要な種々の常識も得られます。

毎月一回發行・學費壹圓
一ケ年半修了・毎月雜誌進呈

商業講義

男でも女でも商業の知識さへあれば、不景氣でも就職は左程困難ではない。本講義は商店、會社、銀行方面に志す男女の爲めに發行するので、之さへ讀めば一ケ年半で甲種商業學校卒業の實力が得られ、立身出世が出來ます。

毎月一回發行・學費壹圓
一ケ年半修了・毎月雜誌進呈

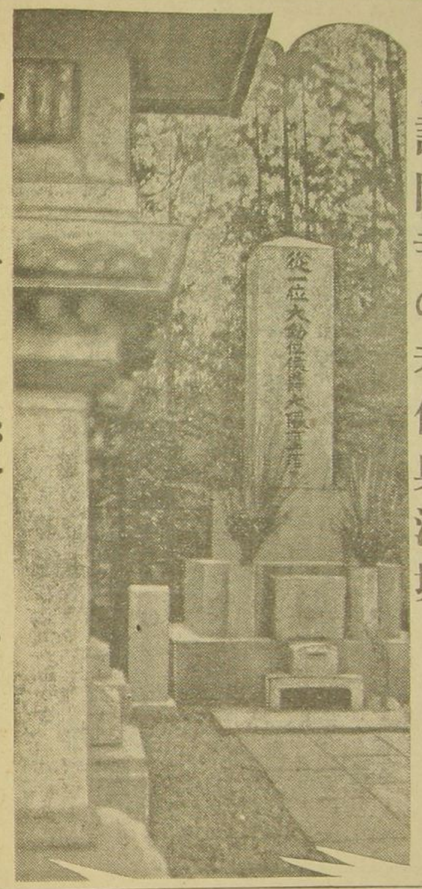
文學講義　月一・二〇　一ケ年半
政治經濟講義　月一・二〇　一ケ年半
法律講義　月一・二〇　一ケ年半
建築講義　月一・三〇　一ケ年半
電氣工學講義　月一・三〇　一ケ年半
電氣工學豫備講義　月一・〇〇　一ケ年

文學講義は文藝の愛好者、作家批評家志望者、文檢國漢文受驗者の爲め、政治經濟講義は斯學專門の學識を得たい人、高等文官受驗者等の爲め、法律講義は司法官・辯護士・官公吏志望者並に法律知識を得んとする一般人の爲、電氣建築の三講義は夫々の技術を修めたい人々の爲めに發行する。

望み の講義を明記して申込次第
見本進呈

東京・牛込
早稲田大學出版部
振替東京一二二三・電話牛込三四五番

◇護國寺の老侯奥津城



今も昔と變らぬ老侯敬慕の情

眞に一世の師表として國民に與へた教訓

大隈重信侯逝いて、十年の春秋は夢の如く流れたが、故侯を慕ふ國民の至情は、今もなほ在りし昔と變ることなく、國歩の艱難、思想界の混沌たる今日、ますゝこの大偉人を想ふの切なるものがある、日東大帝國の建設にその巨腕を揮ひし侯、世界的偉人の盛名をほしいまゝにせし侯、政治に教育にはた思想に、一世の師表として、國民の一大羅針盤たりし侯、しかして重疊たる生涯の波瀾と、曲折せる活動の跡を今にして偲べば、そのことごとくが教訓の資ならざるはない

驚くべき讀書家

世に廣く知られぬ侯の反面

法學博士　鹽澤昌貞氏談

◆侯が靈去後一年日まで、なほ知られてゐない一面を話して見よう、それは侯が非常に熱心な讀書家で、眞に立派な太學者であつたことである、實際政治、經濟、財政、社會、歴史、哲學とあらゆる方面の學力は驚くべきものであつた、それ學力のすべては何から學ばかといへば、生れながらにして非常な讀書家であつたからである、世間では勿論、政治上深い關係のあつた人でも、よく侯を評して『耳學問の大風呂敷』といつてゐた、侯自身もその世評には氣づいてゐたが意に介しなかつた、また一方では、侯の學識は學問（早稲田）の學者は勿論、侯の門をたゝく世界各國の學者から聞いたことを、綜合してみるのだらうといはれたが、この風評は二つとも大間違ひであつた、といふのは侯の讀書家であつたことのこの一事を公にすることで無きると思ふ

◆侯は平常書室にあつては、本ばかりを讀んでゐられた、新聞物は目を通さないものは、ほとんどなかつたといつてよい、定められた面會時間の外は常に讀書してゐられた、それは恥にゐられる時ばかりでなく、正月と盛夏を送る國府津の別荘でも本を離さなかつた、殿行するときでも常に數冊の書物を携へて、車中廳員等が疲れると、自分は本を出して讀んでゐられた、侯は侯と學識上の交渉學者であつたことである、實際政治、經濟、財政、社會、歴史、哲學とあらゆる方面の學力は驚くべきものであつた、それ學力のすべては何から學ばかといへば、生れながらにして非常な讀書家であつたからである、世間では勿論、政治上深い關係のあつた人でも、よく侯を評して『耳學問の大風呂敷』といつてゐた、侯自身もその世評には氣づいてゐたが意に介しなかつた、また一方では、侯の學識は學問（早稲田）の學者は勿論、侯の門をたゝく世界各國の學者から聞いたことを、綜合してみるのだらうといはれたが、この風評は二つとも大間違ひであつた、といふのは侯の讀書家であつたことのこの一事を公にすることで無きると思ふ

◆侯は平常書室にあつては、本ばかりを讀んでゐられた、新聞物は目を通さないものは、ほとんどなかつたといつてよい、定められた面會時間の外は常に讀書してゐられた、それは恥にゐられる時ばかりでなく、正月と盛夏を送る國府津の別荘でも本を離さなかつた、殿行するときでも常に數冊の書物を携へて、車中廳員等が疲れると、自分は本を出して讀んでゐられた、侯は侯と學識上の交渉學者であつたことである、實際政治、經濟、財政、社會、歴史、哲學とあらゆる方面の學力は驚くべきものであつた、それ學力のすべては何から學ばかといへば、生れながらにして非常な讀書家であつたからである、世間では勿論、政治上深い關係のあつた人でも、よく侯を評して『耳學問の大風呂敷』といつてゐた、侯自身もその世評には氣づいてゐたが意に介しなかつた、また一方では、侯の學識は學問（早稲田）の學者は勿論、侯の門をたゝく世界各國の學者から聞いたことを、綜合してみるのだらうといはれたが、この風評は二つとも大間違ひであつた、といふのは侯の讀書家であつたことのこの一事を公にすることで無きると思ふ

◆侯は平常書室にあつては、本ばかりを讀んでゐられた、新聞物は目を通さないものは、ほとんどなかつたといつてよい、定められた面會時間の外は常に讀書してゐられた、それは恥にゐられる時ばかりでなく、正月と盛夏を送る國府津の別荘でも本を離さなかつ

死ぬまで一貫した侯獨特の抵抗

法學博士　浮田和民氏談

◆侯は侯の靈は藏年から日月經るに知く、いつの間にか大隈侯の靈去以來、早や十年を經過したい、ふまでもなく侯は大人格者であつた、政治家としての技倆は、維新元勲何れも分社に持合せて居たやうだが、なかんづく大隈侯には二個の因縁なる特質が、他の元老よりも遺憾に優遇であつた、侯には他の元老が容易に企て及ばない實行力があつた、侯は時としてはすべての元老を相手として奮闘された、または時としては政黨にも分離して、單獨にて奮闘されたこともある

◆侯は如何なる場合にも、侯は人格者として立ち、優に他人格者をも抵抗し、その間默せずには居られないほどの力があつた、この大抵抗力の實現は時代より八十歳頃で終結に一貫して居たやうで最期に臨み死に直面されたとき『今度はいよ〳〵死の御使がくるかもしれぬ』といつてゐたが、せねばならぬことになつたはれたときには、早稲田の

署名されるのを一、二度垣間見た

偲ばるゝ『無筆の英雄』

武富時敏氏談

老侯は何故生涯筆をとらなかつたか？――よくわしはかういふ質問を受けたものだ、老侯は凡庸と異なつたたくさんの風格の持主だつたが、特に字を書かないといふ點は、一世の驚異であり、なぜでもあつた『無筆の英雄』こそ老侯にふさはしい稱號だ

◇

ほんたうに、たゞの一度も筆をとつたことがなかつたか？わしの知る限りでは、老侯としてものつぴきならず、筆を手にせねばならぬ場合が往々あつたといふのはしばしば政府の要路に立つたゝめに屢乘とも署名をせねばならなかつた、だがこれとて人の面前では出來るだけ避けるやうにして書かれた、明治卅一年、老侯が首相で、わしが內閣書記官長をつとめた、その頃老侯が屢なく筆をとつて、署名されたのを一、二度見たことがある、だがそれはほんとに、垣間見たゞけなので、その書風、巧拙は全く記憶に殘つてゐない、だから老侯の歿生後、いろんな署名が出て來て、その眞僞をよく聞かれたが、何とも判斷がつかなかつたのである

◇

では何故老侯は筆をとらなかつたか？――それについては老侯に聞いたこともなければ、老侯が語られたこともないが、別に深刻な原因があつたのではなく、たゞ筆に字を書くのが嫌ひだつたからしい、誰でも子供の時イロハを覺えるのは、習字によるものだが、老侯は眼で覺えたものらしい、よく考へて見ると、字を書かないからといつて、利益があるわけではなし、不自由至極だらうと思はれるが、そこには老侯獨特の方法があつた、それは老侯天賦の驚歎すべき記憶力である

◇

吾々だと何か心覺えを手帳に書きつけておかなければならぬが、老侯はこれを總て頭のページに書きつけておかれた、記憶力がいゝ、記憶力にたよる、從つてます〳〵筆から遠ざかられたものだ、才能は修練を積るほどのびるものだ、從つて老侯の記憶力はさえて行く一方であつた、だから老侯の驚くべき記憶力を助長したのは、實にその無筆主義である、晩年あの高齢で記憶力の點では遙かに壯者を優いだ

偉大な新聞記者

『世界の道は早稲田へ』

市島謙吉氏談

大隈老侯が亡くなられたその日から、天地が急に暗くなつたらうと、全く待つたなしに空々と立てるあたり、常人の遠く及ばぬところであつた

いつたい

維新の元勲達はすべて在官時代に際立つた仕事をしたが、一旦野に下ると何をしてゐるかわからなくなつたところが、老侯は野に下るぎよ〳〵金々仕事をする、これが他の人と大いに違つた點だ、『政治はおれの生命だ』といつた位で、政治上の事柄は勿論であるが、ひとり政治的のことばかりでなく、當時の社會的、文化的の事業にはすべて力を入れられた、特に自ら國民外交をもつて任じられた『世界の道は早稲田に通ず』といふ具合で、來朝した外國人達は外交官、新聞記者、實業家その他如何なる地位の人でも、一ケ瞬に向はずして先づ早稲田に駕せつける、富士を見ることは、大隈さんに會ふことが、日本に來た士產たと彼等は思つてゐた

自ら國民

外交をもつて任じた老侯は、常に國民の一人として外交を論じ、政黨政派に偏しなかつた、時には反黨派の方針といへども大いにこれを支持し慎重に國際日本の立場のせん明に努めた、外國人達が異口同音に『日本の外交は大隈さんに聞かねばならぬ』といつてゐたほど、國際外交については公平に論評を下してゐた、眞に老侯の一言一句は、世界の外交を動かす偉大な力があつたのである、今政治、外交、經濟上の國難來を思はせてゐる時、老侯の如き偉大なる人物が居つたならばと追憶の情に堪へない

可愛がられた……

私の『愉快なお爺さん』

久原房之助氏談

★故大隈侯と相識つたのは大正初年代であつた、いはゆる維新以來の重臣ともいふべき人々は、當時井上馨侯によく集まつたものであるが、私もしばゝ井上邸に出入してゐた、その頃重臣達が內閣の首班として、故老侯を推薦するに至り、大正三年大隈內閣が成立したが、その時分が私と老侯の初對面であつた、その時受けた第一の印象こそ、老侯の在世中、私を老侯に近づかしめた理由となつてゐる

★今日あらためて追憶でもないが、老侯の如きいつ如何なる時でも、瀟洒にして愉快な人は、今日において見ることが出來ない、私はいつも『愉快なお爺さん』と呼んでゐた、そして私を可愛がつてくれた、その愛情は時々心のもつれた時私は『一寸お會ひしたい』と電話をかけては出かけたものだ、そんな時は數多い訪問客を全部退けて直ぐに會つて呉れた、さういふ時は決して政治論や事業柄にはちよつとも觸れない、實に愉快な世間話しよりしなかつた

★會つたゞけで私の氣持ちは何時でも直ち解けて愉快な氣持ちになつて歸るとが出來た、私は常に『愉快なお爺さん』つてゐたので、老侯はお前の氣晴らし相手か、これでは大笑ひしてゐた、老侯はふにつけ忘れられないのはこの點である

◇兩巨人のおもかげ（左）大隈老侯（右）ブライアン氏

侯爵ルーベン氏

大隈侯の反面 曾家 貞氏談

◆侯は若侯の著書は『維新』からだと思うてゐたが維新當時の若い時代からこうそりと著書にふけつたものである、これは當時『長の概力』以外から出て、最初に明治政府の外交顧問の地位につかれた若侯を引き受け、維新政府の『要』に見るとうに、直ちにその新知識に思ひあたるのである、若侯はよく『侯は自分に居るときが『所』時間にるるときが『所』時間である』といつてゐた、從つて若侯は當時の學者達の論文をよく讀んでゐたので、學者達の頭もよく知つてゐられた、著んだ後の批評にも『あれはまだ論理だけで、もう少し勉强しなくちゃいかん』―など〜手きびしいことをいはれた

◆若侯は『學者論を前にしてよく『我輩は無學無識』といはれるのが、演說中のロ癖だつたが、どうしてそれとは反對で、そんな風で學問的の熱心さは素晴らしいものであつた、晩年よく外國書などを侯が述べてお聞かせしたが、時によると『これは面白い』とて、ある夏の炎き三日間ぶつ通しで說明したことがあつた、丁度總理大臣で、そがしい時であつた、『大隈』などの每號の大隈文は若侯自らの口述に成るものであつた

貫した 特の抵抗力

法學博士 浮田和民氏談

若侯は如何なる場合にも、一個の人格者として立ち、優に他の追隨を許さずには居られないほどの抵抗力があつた、この大抵抗力は、その『生』時代より八十餘歲に及ぶまで終始一貫して居たやうである、最期に臨み死に直面された場合に『今度はいよ〜死の『所』に着手せねばならぬことになつた』といはれたときには、早稻田學園の人々は、今こそ若侯が人間最期の敵に向つて奮鬪してゐられるやうな感想に打たれたのである

◇

かくの如く大偉若侯は、『生』より死に至るまで、奮鬪力の旺盛なること常人一樣でなかつた、頑强奮鬪力の旺盛なる人に限り、度量すこぶる廣闊で、敵を惡むこと甚だしいが、若侯にはかやうな敵愾心の『武』は一つも持合せて居られなかつた、慨して若侯は數字に明るく、計算に長じて居られたやうだが、一向『略』には富んで居られなかつた、自分はしば〜『略』地に陷つて、『水』の『嘴』を布かれることもあつたやうだが、强敵に對しても正面攻擊の外、他の兵法を知らぬ『略』の如くに思はれた、『敵』が折れてくれば何時でも『撤』し、『輯』まれたとは何でもうんと、『組』分『肌』の『顧』であつたが、『氣』が高雄にして、いかなる場合にも平靜の『態』を支持され『こ』ことは故意にあらずして自然に出でたのである

◇

若侯には五大『信』があつた、第一に『樂』を愛し、第二には『人』を『拾』ふ、第三には『人』を『奪』ふ、第四には『强』みを『將』來におき、第五には『世』の『爲』め人の爲めになることをなせ、これを『國』世の兵法、長術の『秘』訣といつて居られた、實に『偉』人にして『基』だ『識』を『得』たものであつた、しかし若侯は『第』一より『第』四までは、他の元老よりも多く實行して居られたやうだが、『第』五はこれを理想として、その實現に努力されたことは『疑』ひなきところと思ふ

◇

若侯の『趣』味は『實』廣的であつたが、平民は反つてそれに同『感』共『鳴』し、何『故』ならば若侯の『趣』味がその『實』において高尚に『失』せず、いかなる平民にも理解し得る理想を、充分に『發』揮して居られたからである

敬慕の歌

西條八十

不知火燃ゆる有明の
海のほとりの故郷に
鳳雛殼を破るとき
新日本の夜は明けぬ

藩閥打破の雄叫は
廟堂を搖る曉の鐘
英斷築く千年の
我國交の大方針

ああ、君ありて輝けり
大日本の憲政史
ああ、君ありて十萬の
早稻田の學徒意氣高し

蒼穹に日は輝けど
蓋世の偉人今や莫し
學園の菊、郁々と
尊き慈父の香を傳ふ

侯の年譜

▲天保九年佐賀市賣所小路に生る
▲文久六年弘道館教官となる
▲慶應三年副島種臣と謀つて脫藩
▲明治元年長崎會議事務所外交係となる、次で官命により參與職外國事務局判事を經て大藏大輔兼民部大輔を兼任す
▲明治二年外國官副知事を經て大藏大輔兼民部大輔兼外國事務總裁を命ぜらる
▲明治六年大藏省事務總裁を免ぜらる
▲明治十一年參議首席に推さる
▲明治十四年立憲政體及び國議院開設の意見を上る、同年隈長政治家の彈劾に逢ひ同志門下と共に野に下る
▲明治十五年二月藤田茂吉、犬養毅、尾崎行雄、箕浦勝人等と東洋議政會を起す、三月立憲改進黨を結黨、九月早稻田に東京專門學校を創立
▲明治二十年勳功により特に伯爵を授けらる
▲明治廿一年伊藤博文內閣に外相となる
▲明治廿二年その主張する條約改正案に時論沸騰し反對運動起る、十月遂に來島恒喜に爆彈を投ぜられ右脚を損す、十一月外相を辭し樞密院顧問官に任ぜらる
▲明治二十四年自由黨總理板垣と會見し時局問題を論し極密院顧問官を免ぜらる
▲明治廿五年公然政黨に入り代議士となる
▲明治廿六年松方內閣に外相となる。松隈內閣と稱す
▲明治廿七年二月農商務大臣を兼ねす、十一年外相、農相を辭す
▲明治卅一年六月隈板內閣を組織し政黨內閣の今ップを切る、十一月總理大臣を辭し憲政黨內閣倒る
▲明治卅三年憲政本黨總理となる
▲明治四十年一月憲政本黨總理を辭す、四月早稻田大學總長に就任、稱後專ら教育事業に盡す
▲大正三年第二次大隈內閣を組織す
▲大正五年侯爵に授爵、同時に大勳位に叙せられ菊花大綬章を授けらる
▲大正十年九月宿願盧石病惱殺
▲大正十一年一月十日午前四時三十八分早稻田邸に歸去す

清印刷株式會社

東京市牛込區榎町七番地　電話牛込(34)四二〇〇番・四九八〇番　四二三三番・四七八三番　四二四三番・五三二〇番

大隈侯八十五年史

偉人の再現!!

大隈侯八十五年史
刊行會編

東京神田・振替東京五〇一番　冨山房

全四册
定價四十五圓
送料 內地一・五六 鄰邦二・七四

大隈侯の創立になる講義錄

今入會者に限り名著を贈呈す!

四月三十日までの新入會者に限り左記名著のうち一册を贈呈す! 會費の二割乃至五割の大割引で入會絕好機會!

一ケ月分會費納入者に贈呈する名著
永田秀次郎氏著 建國の精神に還れ (資料一十錢 送料貳錢)

三ケ月以上會費納入者に贈る名著
實業之日本社編 財界巨頭傳 (價一圓二十錢 資料十錢 送料十錢)
實業之日本社編 市井奮鬪傳 (價一圓二十錢 資料十錢 送料十錢)
右同著 大隈侯八十五年史 (價一圓 資料八錢 送料十錢)
右同著 歐洲に使して (價一圓五十錢 資料十錢 送料十錢)
鐵山壽夫助氏著 濱口雄幸氏論辯集 (價一圓五十錢 資料十錢 送料十錢)
小山廚清氏著 煽動大煽動 (價一圓五十錢 資料十錢 送料十錢)

【注意】希望書目の名稱は圓價順にまとめてお送り願ひます。

大特典 實業講習錄

講師は博士や大學教授で切磋琢磨易平は義講目

甲種商業全科・講習三十四科目

會長 實業之日本社々長 增田義一

顧問、實助員は官界、學界、實業界、教育界の最尙名士ばかり揃ふ

▲卒業が一年で早い
▲科目はスグ役立つ
▲講義は平易で親切
▲學費は一流の名士役員は大日本一
▲特色 信用絕大
▲會費が特別安い

會費 一ケ月壹円
△一ケ月壹圓 入會すると毎月一册宛配本
△三ケ月壹圓八拾錢
△六ケ月壹圓貳拾錢
△一ケ年壹圓五拾錢
△九圓六拾錢

見本進呈

ハガキに『講習錄見本』と書て申込の方へ見本をスグ進呈致します!

申込所 東京市麻布區霞町一番地 實業之日本社內 銀座四丁目三番 帝國實業講習會 電話京橋五一二三番・振替東京參貳六番

家庭一品

品質効力第一

齒磨界のナンバーワン

クラブ

NO.1

最新科學の極致を盡せる最も優秀なるクラブ齒磨は齒牙の健康と美を守るクラブ酸を發生せしめず、琺瑯質を保護し強くし、口臭口熱を去つて精神を爽的に齒を強く美しくし、使用後も口腔衛生の目的を完全に達する理想

第一
ナンバーワン

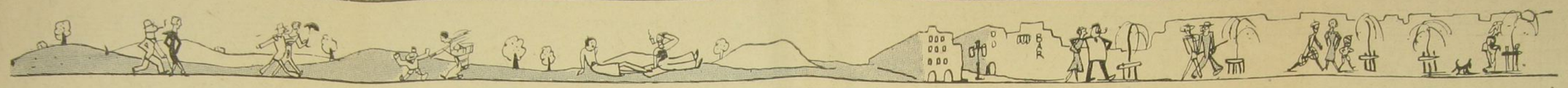
クラブ歯磨

極致を盡して精製
なるクラブ歯磨

クラブ歯磨は、歯の大敵たる乳
質を保護するとともに歯齦を
つて精神を爽快ならしめ、化學
使用後も口中を清潔に保つて
に達する理想の歯磨であります。

粉大 5セン
煉中 10セン
煉大 20セン

家庭一品クラブ歯磨
の輝かしいマーク



懸賞俳句・川柳の入選發表〔第三回〕

俳句

『柳』

長谷川かな女氏選

一等

柳吹く風和やかにいくさの子　京都　牛尾　南風

みいくさの舞にめされる人御國にのこるゝ者、一匹び御國に事ある時、日本人は男女を問はず皆いくさの子となつた心であります。しかして平和を喜ぶこともまた一倍です。四季の氣候に恵まれ、自然に親しみを持つ民は、強くしてやさしい人情味にはぐくまれて居ります。柳を中心としてこれ等の感動を良く現し得て居ると思ひます。

二等

川音にずんく柳しだれけり　神戸　村上きよし

あたかも糸を持つて引きのばすやうな全直な姿現が、盛上つて來る春光の中に生きるものゝ力強さを感じさせます。雪解の水勢の猛き川面も、遠くのそむ山々も、若柳の線に融合つて新鮮な気氣を吸ふ思ひがあります。

猫柳のほゝけて虫を集めけり　町田　前田　曙洋

可愛らしい小動物の感觸を持つ猫柳が、ほゝけてなほも生き物のやうに感じて居る有様、春の闌けた日の小景として面白く描出されて居ります。

三等

先生と堤に遊ぶ柳の芽　神奈川　小宮　志津

ポツくと芽を吹き始めた頃は、春の來たのをほんとうに良く知らせてくれます。水照りをうけた堤に腰ころんでつぶてのやうな振動を見上げ、口許に合はせて賜ふものはローレライでせうか。

垂れ柳小雨しきりとさそひけり　北埼玉　飯島　賢一

晴雨定まらぬ空模様も、芽を伸ばし葉を揃げようとする柳動には自然の賜であつて、一と雨一と雨に成長し、つやを増して行きます。自然を良く見て功まずに自然の現象が詠まれて居ります。

あふらるゝ日覆の音や柳の芽　東京　殿岡みゆき

とろりとした水面の陽をさへぎる日覆の、はたくくと鳴る音を聞くほどに四邊は靜かに、靜かに柳は芽ばえ、背は角ぐみます。

佳作

夕柳に人を待ち居て星を見し　神戸　川上　川舟

花筒に花となりたり猫柳　千葉　石田　陶枝

ふるさとや柳のみどりあるばかり　京都　清水光一郎

芽柳に光る鳴の翼かな　日本橋　久和　奥策

閘門のふもとの挿木柳かな　茨城　荒川　古水

選外佳作

芽柳の空にあがれる氣球かな　東京　吾妻　陽一

鯛焼屋の屑の煙きやや夕柳　四谷　鈴木　杏子

小屋の刈のほつくゝ消えて柳かな　福島　矢鍾谷保明

青柳や旗たてゝある小さき家　青森　小野　馬人

釣り上げし蛸の雲や柳の芽　千葉　木下　蓑雄

青柳や石の上なる藥たわし　松本　古田　寸波

玉貝のつきし柳を折りて來し　千葉　山田　柳風

柳から浦ける翅虫や水面うつり　東京　小栗　四郎

ゆり動く柳にぬれし袂かな　新潟　中村　城雨

たまゆらの風に柳絮の吹かれるる　福島　櫛山　磐山

芽柳をうつ水樽や十二橋　千葉　金田　健定

競馬場柳を折りて晴れになり　東京　原田敬三郎

雪解けの河上寒し柳の芽　本所　小島　鷗子

自動車に觸るゝ新芽の柳かな　東京　渡部　武

古槙の土手に芽をふく柳かな　本所　國松　正男

芽柳や星居をめぐる水うゝ　小石川長井　無量

柳から柳へ渡船渡りけり　東京　櫻井　一風

柳芽に出て明るき午後の日差し　福岡　大石日孝子

青柳にうす霞ありて大井川　福岡　渡邊　眺蓼

ガスの灯や街路の柳刷とど　茨城　河野　白鷗

懐しく柳の土堤にまろびけり　青森　渡邊秀四郎

乘馬家ふれゆく土手の柳かな　秋田　鈴木　碧洞

青柳や蜜てに近く家舞浮く　東京　佐田　桃草

水は目に増して柳ゆらとゝく　東京　大山鳴雪子

細波や柳の発枝ゆれやまず　四谷　關川方塵骨

揚くる荷に夕焼ふ柳かな　京橋　松岳　綱雨

柳絮飛ぶや祖に古墳の影搖るゝ　本郷　中島　綠紗

糸柳そよぎにかしく蛇の目傘　東京　保坂　現蛟

夕くれの柳に入る日西しぬ　東京　湯澤　宗青

水晴のまばゆき岸の柳哉　東京　川彩　重一

晝過ぎの水に柳の影ゆらぐ　小石川佐久間生人

デパートを出でゝ銀座の柳かな　群馬　金子　崖風

垂れ柳見の水にとゞかざる　高崎　平井　金進

青柳の下に國日し兎の子　新潟　黒澤奈美子

砲利船の柳のひまを下りけり　東京　加藤　彌門

凱旋に眺ふ靡の柳かな　埼玉　小宗　喜一

柳くゞり時計見に來る隣人　東京　佐野九鳥三

大いなる帆船潮る柳かな　埼玉　小里　勇子

鳥貝の殻つむ濱の柳かな　神田　小里　馬子

繭船の柳の影ゆらぐ柳かな　福島　馬場　保坂

鯉が潜れて祭の柳哉　群馬　櫻井はなよ子

柳彫りつれる手水つかひけり　高田　佐藤不知章

二タ所砲利の山ある柳哉　浅草　矢田　柏雨

京の春吹いて川の向の柳から　京橋　金見子咲子

垂れ柳墨浮く川の向の柳から　宇都宮　谷内　末治

蓬の風吹き上げてゐる柳かな　青森　王子　晴雨

蓬の風吹き上げてゐる柳かな　古沼　晴雨

芽柳の細枝すかして洲ひろし　仙臺　小原ひさし

はなやかな銀座の舗道柳影　麻布　坂本　光雄

頬を吹くほどの銀座なり青柳　日本橋　小嶋　丙郎

川柳泥にまみれて居る子かな　榎生　湯浅　雲友

舟巡猶ゝや柳の揺れいたる　三浦　鶴　雲

遠柳水は舊に流れたり　神奈川　佳鶴　曉雨

纜を渉る鷺や柳の芽　横濱　新宮日出男

芽柳やバッと灯る船燈子　長野　平野　耕波

住み馴れて堤遊るき水ほとり　栃木　水品梨園子

川岸のくづる雪や猫柳　秋田　山鹿　坊人

養魚池の周囲の芽吹きけり　岡山　三木　花人

家根干して堤々に荷船かな　愛知　宇都宮　檜山

芽柳や魚荷着きたる潮忙し　神奈川　現舟　章

校門の柳見返す別れかな　群馬　横原　松枝

石柳く水に柳の匂ひけり　深川　根本信四郎

あゝ〜と大雨降る柳哉　浅草　橋本　登仙

米寶りに來て牛繋ぐ柳かな　門司　本戸　久水

水を隔て城美しき柳かな　埼玉　三矢　紫雲

ピクニック蓮華の中へ下駄を脱ぎ　市外柿木　清水　米花

評　すわつてゐる膝もまた蓮華草。清白蓮華の花野、春光あまねし。美しい句。

選外佳作

手招きへ手招き返す野の蕨　長崎　陶　培柳

野遊の子を惜めて車井戸　弘前　石岡カク坊

ピクニック紹介をする七ッの子　新潟　高橋　梅泉

振粒の顔も嬉しいピクニック　東京　野田　春秋

百姓の眼に鎌澤なしピクニック　東京　田島　千代

野遊のこゝへ飛行機塗りてこい　大阪　森　廣人

ピクニック親子三人たべる事　東京　稲　光好

ピクニック人の座つた草がある　群馬　木村　愛郎

ピクニックのろい妻へも愚痴　埼玉　長谷川政人

ピクニックまた腹が減り腹減る　埼玉　沼治

野も丘も人も憩まれ初つた春　東京　田中　良平

パラソルの中に三人茶を取り　八幡　中野月出雄

ピクニック父が泥ま茶屋で食ひ　小林　九年

祭日の旗が嬉しいピクニック　小井　鶴水

ピクニック青さの中にゐる妾　群馬　曰井　鶴水

養鶏を視察がてらのピクニック　三重　新一郎

ピクニック子に起さる日本晴　横濱　水島　翠

ピクニック何か探して歩いてる　東京　肇本　柳二

ピクニック天氣模様を字は信じ　三好小鳥子

ピクニック風の鬼面たはられ　新潟　小田　友吉

ピクニック父の故郷もこんな藤　岐阜　鈴木　清

今日の野へ釣糸を垂れる左の手　長野　大坪　樂京

若いから嬉しい春のピクニック　芝　御幸　蘆

ピクニック父を酔はせぬ事にも　佐原　小澤平藤次

ピクニック父の故郷もこんな藤　水戸　門井　勇

日曜を子の氣に任すピクニック　伊野日出丸

藤棚潤の子も餐　藤棚ピクニック　埼玉　谷合たゝし

ピクニック拾つたら好い天氣　東京　關根ひさこ

野遊へ東京のてを落ちてくる　埼玉　高野　幸風

ピクニックラヂオで聴く好天氣　長崎　三浦　秋次

ピクニック雲雀の下を方へ向き　岸田　綱雲

親と子の心に今日の春の鷹さ　千住　祥雨

ピクニック何も知らぬ大人を連れ　千葉　十柳年作男

ピクニック末ッ子を乗せバスケット　四谷　蕭田　琴柳

愛犬は何から猫つて野に遊び　長野　百瀬　紫水

ピクニック父が猫弾く三馬士　日暮里　陽文

囀り合ふ親の上に鶯　神田　櫻池花子

ピクニック子に馬たちの騎兵隊　横須賀　鈴木　又蔵

ピクニック父せめて都の遠さかり　山梨　大木　白雨

ピクニックの子に空の折も疲れ　神田　栗本　元雄

ピクニック食ふ子ふと引揚げ　小松川　鈴木　鬱

野遊の疲れやつて蔭がある　四谷　鈴木　杏子

蒲公英へ遊ぶ家の子陰の子　山梨　尾形　林

花へ兒のはぶに任せピクニック　松本　神谷　常

懐ろに洋書が重いピクニック　行方　出久根　鶴

野遊に來た蔭びを抱き上げる　尾久　林　常

ピクニック必ず何か持たされる　福島　大槻　合

眠られた重い背中を嬰が減し　富山　成瀬　洋

ピクニック水を見ると子が走り　銀座　上村　紅

ピクニック道を迷うたのも恒快　麺町　山本みさを

ピクニック夕焼け背の子と唄ふ　栃木　酒井　鷹

野に遊ぶ事にも女着飾つて　東京　清水　秀

ピクニック今日一日の大地主　神田　中村　直

ピクニックシャツ一枚なる見心　新潟　野口　春

ピクニック此處でも行儀悪ぎり　本郷　鈴木　久

ピクニック今日は四幾を服る父　千葉　金岡　芳

持つてゆた次は使つたピクニック　茨城　出久根　鶴

ラヂオ聴かぬ水淋し樣ピクニック　大槻　多和　秀

ピクニック是から歩く橋を渡え　群馬　川瀬　秋

囀りの下で一家の揃り飯　東村山　柏木　常

ピクニック暗黒の旅に川暮れ　甲府　土橋　巧

蓮足へ言つてきかせる井の蹴　神戸　内藤　巧

毒草の手を持つ蔭ピクニック　下谷　吉見　元

拙一人地蔵に気づく揚飯　函館　西尾　正

ピクニック日乘の内へさゝやかれ　古志　岩元　茂

ピクニック提携たされる事ばる　荏原　荏原　左

野に遊ぶ父が小麦の春の眼　横濱　下田　鶴

半日貴車振つてるクピクニック　深川　中田　貴

野遊の疲れ小学生ピクニック　大宮　中田　貴

ピクニック風吹出ない野原さ　札幌　松本　寿

ピクニック子父へ行き徒ピクニック　下谷　溪田　横

ピクニック無駄ダイヤは足を持つ　足尾　鑑淡　寿

ピクニック御馳走を持つ帰家る　神田　吉村　光

俳せた形ばかりなるピクニック　牛込　須坂　鶴

ピクニック荒野エルトの跡紅の跡　須坂　鶴

ピクニック徒と云ふ氣で出ない　横浜　鶴

ピクニック明治の歌にあるり家　宗　鶴

ピクニック少し貧ひ太鼓ある　北多摩　高橋

ピクニック子に子に飲れ　高橋　谷

ピクニックらしく座つた草の上　横濱　鶴

ピクニック嬰小手かざされ　静岡　法月

ピクニック嬰の手の蔭を貸られ　横濱　新田

野遊の不景気草を貸られ　下田　鶴

ピクニック嬰小手かざされ　千葉　岡野市

野遊の嬰の蔭へ白鳥丸くなり　水戸　米川宗

玉川となる水鏡柳ゆらめきたり　鶴見　田中

窓の灯がさして雨降る柳かな　千葉　鶴川

水みつめ悲しくなりぬ夕柳　佐原　櫻屋

四五本の柳おぼろの夜釣かな　野方　佐藤　鶴

水に届く影みづ〳〵しく若柳　本郷　前田　秀

柳絮巴に伸びて揺れるたり　東京　齋藤　鶴

猫柳光れる店や青柳　渋谷　清水　石

柳の芽ふらふらと春子歩けり　横濱　横濱

蜘蛛ふ水搖れ及ぶ柳かな　長野　永井久次郎

柳の芽やかやかにあるゴルフ場　岐阜　山路　浪

水鏡の地にはぐれ行く柳かな　千葉　林　美

上げ潮に柳の水面動きけり　千葉　渡邊

柳芽を星ふるほうで宵のほど　本所　島田六三

こゝに來て川の曲れる柳かな　高野　岡崎

雨降つて來しあかるさや柳の芽　八王子　島田

柳會青みて堤の雨柳し　日本橋　都　良

灯ともせる水香小屋や垂る柳　小石川　尾崎

川田に水鏡のある柳かな　茨城　安藤貞

飴賣りの今日も柳の下にゐる　栃木　石塚置

芽柳や陣りの小鳥よく鳴いて　群馬　鈴木　清

小鮒焼く河岸や柳青みたる　茨城　小泉

青柳水輪ひねもすおこりけり　栃木　村田

灸々に綱干して柳かな　茨城　石山みな

母の灯のさして雨降る柳かな　千葉　金谷

繭柳水の夕虹なびかめり　東京　藤澤

強風に撓ける土手の柳かな　千葉　藤澤

かぎりなき望に雨降る柳かな　東京　藤澤

柳芽ぐむ空に風船飛ばし居り　群馬　花井

亀鳴ての一つは清らに目もすが　群馬　横田

青柳は引きあげてある生簀かな　東京　保科ぎ

船の座へ柳刷るくゞりけり　東京　羽田八郎

青柳やこのあたり賣家鴨飼ふ　神奈川　落合

猫柳水底に愛のゆきゝかな　富山　牧野

芽柳の明るきやそよぎかな　東京　水野と

芽柳にしたゝかぬれし細かな　東京　大畑

昨夜降りし濁流の灰や猫柳　東京　佐渡

水鏡の雑魚寶り居たる柳かな　東京　岩井

退院の門にまぶしき柳かな　栃木　安藤伊

井戸端の柳に子雀の洗しよう　群馬　湯浅は

猫柳のほうけて見ゆる日和かな　福島　佐々木

その下にもの炊く舟や夕柳　長野　堀田

吹きなびく柳かむりて濡ぎけり　長野　宮城

子供等の馬み合ひ猫柳　福島　吉田

蒲ちて來る江潮へとゞく柳かな　福島　中島

童画の遠く渡れる柳かな　三重　佐渡

築はしるの水の白さや猫柳　東京　中本

芽柳に捧統して塔別荘　東京　金子

芽柳や蛙鳴開きて丁もすが　神奈川　秋山

芽柳の明るき家に嬰きけり　神奈川　海の

青柳や蛙鳴開きて丁もすが　神奈川　江川

芽柳や水閘り搖るゝ蓬頭　東京　武田

芽柳の空にあがれる氣球かな　東京　秋山

猫柳の影ゆらぐ柳かな　東京　秋山

猫柳の影ゆらぐ柳かな　東京　秋山

猫柳の影ゆらぐ柳

全く自然の照映

長谷川 かな女

日々推敲されて行くおびたゞしい俳句の葉書が、大机の上に段々と山積をなして来ますのを、一度草の芽が少しづゝ少しづゝ伸びて来るのを見るような驚ひを感じて眺めて居りました。これだけ俳句を詠む人が眞實に自然にぷつかり、親しんで居るとゞ考へますと、ちょつと感動になりましたから俳句を作つて見ようか、とも思ひます。

いふやうな作るといふ持て出来上つた句が多數であつたらと思ひます。それが眞に作つてございます。若しも、それが眞剣でございました。

幸ひにこゝに選出致しましたものは、全く自然の照映である俳句でございます。しかしながら、自然の中に時代の交流のある事、一歩も社會の流潮のない事に注意を向けて考察されて居る作家のあることをうれしく思ひました。それからもう一つうれしく思ひますのは、大新聞が一ページを大衆に開放して、まことに天眞らん漫と、自分々々の生活から感情なりを充分に訴し、各々夢の中に心おきない休息所を得られたといふ事でございます。

生殖

機能を充溢せしめて

春宵一刻

愈樂し!!

萬象蘇る春!!老若男女の別なく永い冬の鬱屈から伸び上る惠みの春!!凡ての細胞は一齊に活動を開始すると同時に各種の病源體にも春が來た事を忘れてはならぬ。

殊に吾人等に春は物憂しと感じさせるものは性慾の顯著な減退である。從つて精力、頭腦の衰微を加へ懶惰、倦怠を訴へるは啻に五十六十の老齢のみならず、二十、三十の壯者にもこの神經衰弱的早老の兆候が見出せる。今にして對策を講じなければ悔は千歳に殘ると斷言する。

この老衰兆候及性慾減精力の減退は何に原因するか、即ち人體構成の最大要素たる生殖腺の萎微衰退によるものであると最近科學は立證して居る。

トツカピンはこの學說に示す如く製劑の根據を生殖腺内分泌學上に置き何よりも性慾の衰微を復活せしめ精力、頭腦元氣を夫々根底的に充實せしめるものである。

性的に復活し、充溢せしめ、補給する至寶の存在として敢て推奬するものである。

春だ!!飽くまで愉樂を滿喫せよ、必ずトツカピンを所有に置いて……。

下記の病狀の人々に

是非推奬す

◇神經衰弱て……頭腦重く、常に頭痛に惱まされ思想混亂の人。

◇性的早老て……性慾は減退し心身の氣力を失ひたる人。

◇陰萎早漏て……性的不滿を感じ、深刻なる悲哀に包まれる人。

◇遺精夢精て……不快煩悶し日夜悶々として少も感激なき人。

◇不眠症て……原因不明で熟睡出來ず、雖夢に襲はるゝ人。

◇健忘症て……思想の統一を缺きど忘れし易く根氣のない人。

◇記憶力衰へ……暗記物など絶對に出來ず事物を混動する人。

◇ヒステリー……不感症となり沙靡狂暴常ならざる不幸な婦人。

●全國到處の藥店にあり

品切の節は本舗へ前金註文＝送料不要 代金引換＝送料實費（目立ぬ樣送る）

●更に健康を誇る男女も元氣、精力の補給劑として本劑を常に服用すれば一種言外の强味を感得すべし。

藥價	
三〇錠	三圓
五五錠	五圓
一三五錠	一回一日
十四錠	一回
廿四錠	三回

五圓以上携帶郵送費

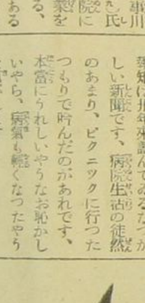
發賣元 東京市銀座西三丁目一 合資會社 丁子堂

電話京橋 長五五一番 長四六四番 七五五番 七二二一番

振替東京 七二二一番

病床で大喜び

一等當選の福田翁



『ピクニック』二足いくらの足袋が

欣快慶賀

飴坊

千葉 鵜川 可有
佐原 硫黄 福島 矢部 博生
野方 鶴俊 埼玉 埋原 鶴楓 池端に枝はそんと柳かな 福島 佐藤清夜章
本郷 前田 秀家 五六羽の雀に搖れし柳哉 柳かげ窓葉の色動きつゝ 芽柳をたゝか押して鄰の柵 芽柳をたゝか押して鄰の柵 芽柳のもとにひまなき無政かな 家の中に迫る水車や糸柳 糸柳池に打れる茶漬かな 鶯一羽柳の風に吹かれけり 芽柳や緑日遮き風船店 砂利日ふ水に柳の枝垂れ居る 今日の荷を掲げてまぶしき柳哉 魚籠猫柳さして野菜賣 青柳の堤にねそべる牝牛かな 西園七到すこやかに柳かな 水に馴れて舟に休みけり柳の芽 青柳によき水持てて住ひけり 水晶れの虹の下なる柳かな 芽柳の色に雨降る鄰か哉 糸柳流るゝ方へ靡きけり 雨晴れの砲に柳の雫して さら〳〵と砂ふれて行く柳かな ホロ馬車の蔭に休める柳かな 雨ばれの柳をつゝる雲哉 門巡に見えて風ある柳かな わだましの宿がぬれて柳哉 舟人の顔するしら遠柳 風ふけば恋に柳のどとく哉 水鶏門を遠く柳のつゝきけり 蛍門を遠く柳のつゝきけり ちか〳〵と水光り居る柳かな 流れ行く水なつかしの柳かな

空氣徑上げて遊べる柳哉 長野 林 美須子 千葉 鶴川 可有
千葉 鶴川 可有 芽柳の雨粒々に光りけり 青柳にとどく風ぎし人江かな 乙黒 桂川 池の隣柳に濃く夕日さす 工場の門や柳の夕ひぐく 芽柳や風あり鄰の湖ぬる 夕映の砲に少し風ありぬ たちなつぶ川湯の柳舟見えし 川の面にうつれるしだれ柳かな 神奈川 鈴木 都鳥 魚はね柳の影の光りけり 芽柳に明るく瞰れぬ水の鑑 金魚釣山郎 大森 さゝむ 富山 奥村 耶鳥 佐藤 一松 大野三三九 宮城 高橋 芳枝 留守の門柳結んで居りけり 横濱 石渡清太郎 長野 南 太郎 東京 小山 青草 新潟 坂井 一郎 長野 北澤 水仙 秋田 九里 久詩 兵庫 大森 滴々 新潟 瀧澤出子 栃木 小倉 盛夫 栃木 櫻井 節 千葉 木下ひろし 青森 船樹 勝治 八田 金鼎 新潟 渡邊 秋幸 新潟 齋藤三十二 群馬 小野文榮隅 群馬 須藤 一光 栃木 黄山 秀峰 栃木 黄山 雨降る柳かな 東京 大畑 吉雄 東京 岩井 信子 栃木 安藤 砲比子 群馬 湯浅はなす 福島 佐々木慎三 長野 堀田 蝶子 宮城 吉田 美江 福島 中島 思次 三重 佐渡 貢 東京 中本 柏 東京 秋山 晴峰 神奈川 海の邊人 神奈川 江川 俊吉 東京 武田 清風 千葉 金岡 芳枝 栃木 酒井 鷗風 栃木 清水 雷風 埼玉 大宮 赤里 千葉 出久根邊人 岐阜 深澤小茶里 柏木 川瀬 秋草 東村山 大川 湖北 甲府 土橋 孔月 神戸 内野 桃水 吉見 清美 下谷 石光 邑人 東京 古志 悦坊 岩元 吉平 山形 笹目左右芽 千葉 横濱 石川 福蘭 深川 下山 清湖女 大宮 中田 英里 札幌 松本 明 長野 藤田 富雄 下谷 澤田 雄蔵 足尾 鶴波 宮沢 神田 青木 半蔵 水戸 田中 鍵太郎 仙台 鈴木 ゆ子 須坂 關口 朗史 京都 遠山新生子 宗野 草野 横濱 秀谷 陸夫 横濱 法月 蕉思 鶴見 石田 一郎 横濱 内野 桃水 新田しげる 千葉 米川宗義蕉 鶴見 田中 美水 群馬 武田 清風 神奈川 海の邊人 東京 秋山 晴峰 神奈川 江川 俊吉 東京 武田 清風 千葉 金岡 芳枝 栃木 酒井 鷗風 栃木 清水 雷風 埼玉 大宮 赤里 千葉 出久根邊人 岐阜 深澤小茶里 柏木 川瀬 秋草 東村山 大川 湖北 甲府 土橋 孔月 神戸 内野 桃水 吉見 清美 下谷 石光 邑人 東京 古志 悦坊 岩元 吉平 山形 笹目左右芽 千葉 横濱 石川 福蘭 深川 下山 清湖女 大宮 中田 英里 札幌 松本 明 長野 藤田 富雄 下谷 澤田 雄蔵 足尾 鶴波 宮沢 神田 青木 半蔵 水戸 田中 鍵太郎 仙台 鈴木 ゆ子 須坂 關口 朗史 京都 遠山新生子 宗野 草野 横濱 秀谷 陸夫 横濱 法月 蕉思 鶴見 田中 美水 群馬 武田 清風 千葉 米川宗義蕉 鶴見 田中 美水 群馬 武田 清風 千葉 金岡 芳枝 栃木 酒井 鷗風 栃木 清水 雷風 埼玉 大宮 赤里 千葉 出久根邊人 岐阜 深澤小茶里 柏木 川瀬 秋草 東村山 大川 湖北 甲府 土橋 孔月 神戸 内野 桃水 吉見 清美 下谷 石光 邑人 東京 古志 悦坊 岩元 吉平 山形 笹目左右芽 千葉 横濱 石川 福蘭 深川 下山 清湖女 大宮 中田 英里 札幌 松本 明 長野 藤田 富雄 下谷 澤田 雄蔵 足尾 鶴波 宮沢 神田 青木 半蔵 水戸 田中 鍵太郎 仙台 鈴木 ゆ子 須坂 關口 朗史 京都 遠山新生子 宗野 草野 横濱 秀谷 陸夫 横濱 法月 蕉思 鶴見 田中 美水 群馬 武田 清風 千葉 米川宗義蕉 鶴見 田中 美水 群馬 武田 清風

ピクニック連 米子名志岳 神奈川 岩崎 敏人 ピクニック朝の國旗 風が出る 上田 深見 清子 ピクニック十錢の賣ふピクニック 松本 神谷 正司 ピクニックカメラ 雲の置き所 行方 出久根八郎 ピクニック笑へば笑ふ世と居る 尾久 林 常千 パラソルへ母を乗せピクニック 富山 成瀬 遊歩 一日を子に捧げたりピクニック 銀座 上村 紅一 足四本投出す丘に草が萠え 麹町 草木 立南 毋望となつて久しいピクニック 東京 秋山 晴峰 ピクニック子供に草の名を學び 若草へ汐も一家で御座候 日曜の朝を見上げてピクニック 京都 高浪 雅湖 ピクニック派音巻に手が汚る 京橋 關 三郎 ピクニック小川を飛ぶ母を連れ 松阪 羽根 一朗 ピクニックお玉杓子が居た蔭ぎ 大井 川上 狐友 ピクニック朝の國旗 風が出る 上田 深見 清子 ピクニック十錢の賣ふピクニック 松本 神谷 正司 ピクニックカメラ 雲の置き所 行方 出久根八郎 ピクニック笑へば笑ふ世と居る 尾久 林 常千 パラソルへ母を乗せピクニック 富山 成瀬 遊歩 一日を子に捧げたりピクニック 銀座 上村 紅一 足四本投出す丘に草が萠え 麹町 草木 立南 毋望となつて久しいピクニック 東京 秋山 晴峰 ピクニック子供に草の名を學び 若草へ汐も一家で御座候 日曜の朝を見上げてピクニック 京都 高浪 雅湖 ピクニック派音巻に手が汚る 京橋 關 三郎 ピクニック小川を飛ぶ母を連れ 松阪 羽根 一朗 ピクニックお玉杓子が居た蔭ぎ 大井 川上 狐友

行き着く所の麗嶽 ピクニック 北足立 松澤 さく 孝心に取民されるピクニック 阜服橋 天谷 糸人 繁常に行楽の日 ピクニック 岐阜 佐藤 竹二 洋杖に振り甲斐がある ピクニック 東京 大竹 三桂 ピクニック日記美文にして綴り 博多 佐藤十九坊 里親が待ち切てゐるピクニック 向島 横田 良天 ピクニック坊やの涙揮へ喜笑ひ 上田 瀧澤 勝司 ピクニック驛で車へ水をやり 駒込 繪貞郎之助 草の名を色々訊るピクニック 名古屋 市村 春水 ピクニック飛べる飛べるに川の幅 深川 中村兎辻人 春の野に日象地を染め草象 松本 和佐田鈴刀 ピクニック勘定合つて近いとこ大久保 中島地玉子 ピクニック野菜車も押して見る 日光 小林 蓽子 ピクニック黄獣つて驛の道 小田部安太 ピクニック廣布 芝 吉田はん鯨 ピクニック廣布 芝 吉田はん鯨 井上 政男

る、吉見を受けて驛ほう〳〵の態で大喜び、記者や付添ひの男女さんの止めるのもきかず、無理に床の上に起き上つて

黎明は井年來聲んでゐるなつかしい新聞です、病院生活の徒然のあまり、ピクニックに行つたつもりで時んだのがあれです、本當にうれしいやうなお恥かしいやう、羞ずかしいやうなお恥かしなる氣がします

とホク〳〵ものであつた

清新記録眞なものを発見することが出來て結米の國民の紙面眼目の一篇を知り得たが、紙面眼目ありとん〳〵發表し能はざるは實遺憾である

『ピクニック』の樣想は『指』の『味』ピクニックの樣想は『指』の『味』味かつたとか、甚だ家族の別に入りとか、そんな感想が多い中で鋭敏の姫さ蕉想新奇なるを選び得たるは遺憾としての欣快であり、川柳が『鋭』知新記録眞なものを発見することが出來て結米の國民の紙面眼目の一篇を知り得たが、紙面眼目ありとん〳〵發表し能はざるは實遺憾である

清新記録眞なものを発見することが出來て結米の國民の紙面眼目の一篇を知り得たが、紙面眼目ありとん〳〵發表し能はざるは實遺憾である

『ピクニック』の樣想は『指』の『味』ピクニックの樣想は『指』の『味』味かつたとか、甚だ家族の別に入りとか、そんな感想が多い中で鋭敏の姫さ蕉想新奇なるを選び得たるは遺憾としての欣快であり、川柳が『鋭』知新記録眞なものを発見することが出來て結米の國民の紙面眼目の一篇を知り得たが、紙面眼目ありとん〳〵發表し能はざるは實遺憾である